

よく学びよく遊べ！

特集「自発的な学び」

FD委員会では、昨年度から継続して「単位制度の実質化」を活動重点テーマにし、シラバスの改善などに積極的に取り組んできました。

大学における教育の質向上のためには、さまざまなアプローチの方法がありますが、本特集では、“大学における学習のあり方”について多角的に検証します。

教員、学生のそれぞれの視点から、単位制度を実質化するための学生の主体的・自発的な学びを支援するには、どのような取り組みができるのかを考えます。

大学における学びについて、共通認識を持つきっかけとなれば幸いです。

第二段階のFDに向けて

上野 淳（大学教育センター長）

学生の学習活動の現状とその支援

夏目 達也（名古屋大学高等教育研究センター教授）

学生の自発的学習を促す

横田 佳之（都市教養学部理工学系准教授）

ブレンディッドラーニングの取り組み

北澤 武（大学教育センター教授）

学生であることと学ぶこと

伊永 章史（都市環境学部4年）

学べる場所を

田邊 広之（システムデザイン学部3年）

FDセミナー報告

尾崎 悠一（都市教養学部法学系准教授）

本学学生の「授業時間外学習」の現状

舩本 直文（大学教育センター教授）

特集1 第二段階のFDに向けて

上野

淳

首都大学東京

副学長・大学教育センター長・FD委員会委員長

大学におけるFD活動では、単に学生による授業評価（SE）を教員に戻し個別の授業改善を促すことだけにとどまるのではなく、大学全体として組織的に教育プログラムを含む授業改善を図っていくことが大切であると日々考えている。

このSEにしても、開学以来その仕組みを改善・定着させるまでに諸規程の整備を含めて3～4年を要することになった。そして少なくとも基礎・教養教育ではほぼその態勢が整い、安定した仕組みに成長してきたと実感している。これらの成果がこの度の自己点検評価・認証評価に大いに活用され、これら諸データの蓄積が大学の自己改革に大きく寄与したことと自負している。これによって、本学のFDはその第一段階を脱したと考えるに至った。



【著者プロフィール】

上野 淳（うえの じゅん）

都市環境科学研究科

建築学域 教授

専門：建築計画学

2005年 基礎教育センター長

2009年～ 副学長

さて、第二段階である。ここでは、今2つの課題に挑戦しようとしている。

まず、組織的な取組の課題として、‘単位制度の実質化’をFD委員会のテーマとしてとりあげ、取り組んでいる。シラバスの実質化、授業外学習の奨励（1単位45時間）などについて連続的なセミナーを試み、例えばシラバスについてはそのモデルを全学に発信するなどの成果を得たと考えている。未だ課題は幾つも残されていて、例えばGPAやCAP制についての全学的な検討、成績評価基準の全体的な再点検など、気を許せる状況ではないことはもちろんである。

次に、次期中期計画を控えての、基礎・教養教育プログラムの総点検である。開学以来の基礎ゼミナール、都市教養プログラム、情報リテラシー実践、実践英語などのプログラムは逐次改善や制度改定を踏まえて6年間を刻んできた。確実な成果を挙げつつあるが、しかし、改善すべき課題もはっきり見えてきた段階といえる。課題を鮮明にし、全体としてより優れたプログラム体系となるような基本的な見直しを行うべき段階にきていると自覚する。幸いにして、全学横断組織としての‘教育検討プロジェクトチーム’（教育検討PT）が発足し、個々のプログラムの点検、全体としての仕組みの総点検、が急ピッチで進みつつある。ここでも蓄積してきたFDデータが検証のエビデンスとして大いに役立った。この成果は、年度内に一応のとりまとめをし

その後、次年度冒頭から着手できる改善課題について実効性のある手段を順次講じていきたいと考えている。

それにつけても、こうした教育プログラムの立案・点検・検証・改善のPDCAサイクルには、FD等に関

するデータも含め、教育研究に関する基本的なデータの蓄積が極めて大切な要件となってくることを改めて実感した。基本的なデータベースの構築とそれを担うIR (Institutional Research) 機能の整備が急がれる。

特集 2 学生の学習活動の現状とその支援

夏目 達也 名古屋大学
高等教育研究センター教授

本日はこのような会にお招きいただき、誠にありがとうございます。首都大学東京では、平成21年6月に大学教育学会を開かせていただき、私も会員として参加させていただきました。そのときに、広いキャンパスで道に迷いながらあちこちの会場を回ってだいぶ苦労した関係で、今日はまだ2回目ですが既に何回か来たような錯覚に陥っています。私にとっては非常に親しみの持てるキャンパスでお話をさせていただけるということで、大変光栄なことと感謝しています。

さて、本日私にいただいたテーマは「学生の学習活動の現状とその支援」です。この点に関して、これから1時間ほど話をさせていただきます。まずはじめに、講演の目的を3点ほど考えてみました。一つは、単位制度の趣旨です。簡単に言えば、単位を取得するためには、授業時間だけでなく授業外学習時間をきちんと取ることが不可欠の構成要素になっているということです。このことは言わずもがなですが、これをあらためて確認しようというのが第1点です。

本講演の目的

- 単位取得には、授業外学習時間が不可欠の構成要素であること確認する。
- いくつかの調査結果から、以下を概観する。
 - 学生の学習行動は多様化しており、主体的な学習行動が全体に不十分であること。
 - その現象は入学前段階ですでにみられること。
- 授業外学習の時間を学生に促すために必要と思われる大学・教員側の取組について考える。

2番目に、いくつかの調査結果から、以下の点を概観してみたいと思います。一つは、学生の学習行動が非常に多様化してきていて、その中において主体的な学習行動が全体に不十分な状態にあるということです。そしてもう一つは、そういった主体的行動が弱いとい



うことは、大学に入って初めて起こるわけではない、それは実は高校時代からずっと見られる傾向なのだという事です。この2点を、幾つかの調査結果に基づいて申し上げたいと思います。

3番目には、では授業外学習を学生に促すためには一体何が必要なのかということです。その点について、私が所属している名古屋大学の高等教育研究センターの取り組みなども交えてご紹介します。

以上の目的を達成するために、次のような講演の構成を考えています。一つは、高校教育の多様化と生徒の学習行動です。簡単に言えば、高校生の段階から生徒の主体的な学習が全体に弱く感じるというお話です。2番目には、それでは大学に入ってきて、学生たちは一体どのように大学の学習教育に向き合っているのか、その現状を見るということです。3番目に、主体的な学習を促す試みということで、初年次教育の取り組み、ピア・サポート、さらには学生向け学習・生活ガイドについてご紹介し、最後に若干のまとめを行いたいと考えています。

1. 高校教育の多様化と生徒の学習行動

1-1. 政策的に進められてきた高校教育の多様化：文科省の政策

最初に、高校教育の多様化の影響を受けて生徒の学

習行動も相当多様化している、つまり主体的な学習行動が非常に弱くなっているということですが、そのバックグラウンドを簡単に見ていききたいと思います。

高校教育の多様化は、一つは文科省を中心とする文教施策によるものということができます。文科省は高校教育の多様化をどんどん進めてきました。特に1990年代からその傾向は非常に顕著です。一定の年齢以上の先生方からすると、高校の多様化という話とはとくに聞いた、自分の高校時代から実施されていたとお考えになるのではないかと思います。確かに1960年代から高校教育の多様化という問題は提起されていて、政府も進めてきました。しかし、その当時の多様化というのは、ほとんど職業学科に関するものでした。多様化する産業界のニーズにどのような形で応えていくか、あるいは生徒の多様化にどのように応えていくかというのがその当時のテーマだったと思います。

これに対して1990年代以降の高校教育の多様化というのは、主として普通科あるいはそれに類した学科で起きている問題なのです。大きくとらえると、プログラムによるものと制度改正によるものに分けることができます。

プログラムによるものは、よく先生方もお聞きになっていると思うのですが、スーパー・サイエンス・ハイスクール、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール、サイエンス・パートナーシップ・プログラム等です。とりわけ理数系と英語で、重点的な取り組みを行う学校を積極的に支援していこうという取り組みです。最初のころは、いわゆる各地におけるトップ校クラスを中心に支援していました。

制度改正によるものでは、中等教育学校（公立版中高一貫化）や単位制高校、総合学科、総合選択制高校等の施策がどんどんとられてきました。

それに輪を掛けたのが、学習指導要領の改訂です。

1-2. 入学前の学生の学力の状況：多様化が顕著に

簡単に言えば、昔は普通科と職業学科で分けておけばよかったのですが、最近ではほとんどの生徒が普通科に行きます。昔、1960年代はまだ40%ぐらいの生徒が普通科以外、主に職業学科に学んでいるという状況でしたが、現在、その比率は20%そこそこで、80%は普通科に行きます。そうすると、当然そこには生徒の学力やモチベーションという点での多様化という問題が進んできていて、普通科も多様化せざるを得ない。それに加えて学校週五日制という問題もあって、どんどん学校の裁量を拡大して、それぞれ生徒の

ニーズ、あるいは地域のニーズに応えるようにというトーンで政策が進められてきたわけです。

そういう状況なので、勢い生徒の学力、その前提となる学校側の働きかけも、学校によって大きく違ってきます。そして今申し上げたように、学習指導要領でも教科を必ずしもすべて取る必要はないとされたことで、かなり選択の余地も生まれました。その結果、高校で未履修の科目の状況を見ると、とりわけ数Ⅲ・数Ⅱや物理で相当開きがあります。所属の学部によっての開きとも言えますが、履修状況には大きな差があり、履修している者と履修していない者で、学力に相当の開きが生まれてしまっている状況です。

また、生徒の勉強時間も多様になっています。偏差値55以上の成績上位層ではそれほど勉強時間数が減っているわけではないのですが、偏差値50～55ぐらいの2番手の層の勉強時間が、年を追うごとにかなり減ってしまっています。このような状況をとらえて、二極化という言い方もされています。

1-3. 高校生の学習行動や進路意識の多様化

また、学習行動と進路意識にも生徒の間でかなりの多様性が見られる状況です。例えば、毎日予習・復習をするか、あるいは宿題があれば必ずするかという問いかけに対して、成績上位層と成績下位層との間ではかなりの開きが出ています。ただ、成績上位層でも自主的な学習行動、特に宿題がなくても授業の前後、予習・復習はちゃんとするという層は、必ずしも多いわけではありません。当然それが進路意識にもいろいろな形で反映してきます。

教員に対して進路指導を行う上で困難を感じているかどうかというアンケートを取ってみると、大学・短大進学率が70%を超える比較的進学志向の強い高校においても、「非常に難しい」「やや難しい」と感じている教員が全体の9割います。そして、その難しさの要因として、8割の高校教員が高校生自身の意識が昔とは違ってきていることを挙げているという状況があります。

1-4. 生徒の主体性形成のため高校の取り組み

それでは、そのような生徒の状況に対して高校の先生たちはどのように対処しているかということです。もちろんこれは高校によって千差万別ですが、一つ言えることは、いわゆる各県のトップ校、これは東京都でも同じですが、公立で見るとトップ校の場合は旧制中学校の流れを結構引いていて、その文化も教員に結構共有されていたりして、ぎりぎり生徒をしごくということについて消極的な先生が結構いるわけです。

やや極端に言えば、そのような高校だと、勉強をする、しないは生徒の自由だ。できない生徒はできなくて構わない。そういう生徒は勝手に落ちこぼれていくだろうというぐらいの感じで、鷹揚に構えるというか、生徒の自主性に任せるというか、放任というのか、それが多く見られるパターンでした。先生方も多分どこかでそのような教育を受けてこられたのではないかと思います。現在はそういうやり方では、いわゆるトップ校といえどもなかなかやっていけないという状況が生まれています。

私もトップ校といわれている高校の校長や進路指導担当の先生などに、お目にかかってお話を聞く機会が何度かありましたが、大きな変化ということを幾度も強調されていました。今は伝統校でも生徒に対して積極的な働きかけをせざるを得ない。そうしないと生徒は本当に何もなくなってしまって成績も悪くなる。もっと言えば、進学実績が悪くなる。進学実績が悪くなれば、悪循環でいい生徒が集まらなくなってしまう。従って、もうそれは放置することはできないという状況で、伝統校においても相当丁寧な指導を行うようになっています。つまり、主体的な学習力を獲得させるために手を掛ける。生徒が主体的に行動することを待つのではなく、主体性を育てるために教員の側が積極的に働きかけようという状況になってきているということです。

そういう働きかけもあって、手応えを感じている先生も結構います。そういう先生たちが、生徒が何とか自立したなと感じるのはどんなときか聞いてみると、次のようなものが挙げられています。①質問の水準が向上し、本当に必要な質問がきちんとできるようになる。②不本意な結果になったとしても、それを責任転嫁するのではなく、ちゃんと自分を見つめる態度が取れる。③表面的にはしっかりしているけれどもどうかなと思われるような自己主張ではなく、学習方法で自分なりの工夫がちゃんとできる。④そのようにして工夫した勉強方法で自分なりに実践する。⑤その結果として、ちゃんと自分なりの考えも持てるし、資料等々の読み方も深くなる。このようなことも、一つは高校現場で起きているということです。

1-5. 単位制度の基本的な考え方

さて、それでは次に大学の単位制度という問題を取り上げます。そもそも単位制度とはどのようなになっているか、先生方には釈迦に説法の感もありますが、今一度確認しておきたいと思います。

大学設置基準の第21条は、「各授業科目の単位数は、

大学において定めるものとする」と規定しています。つまり、別の条文で大学は4年間在学して124単位と規定されているのですが、その具体的な構成に関しては各大学において定める。ただし、それぞれの単位の時間数については規定していて、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、講義および演習、実験、実習および実技等の授業時間数も決めています。

単位制度の基本的な考え方 大学設置基準第21条

各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

第二項・・・1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮・・・。

一 講義及び演習については、15時間から30時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とする。

二 実験、実習および実技については、30時間から45時間までの範囲で大学が定める・・・。¹²

例えば2単位の授業の場合、学習時間の合計は1単位45時間ですから2倍の90時間です。授業外の学習時間は、総時間数から総授業時数を引いて60時間になります。15週ありますから、60時間を15週で割って4時間。

つまり、2単位の科目を履修して単位を取るためには、1科目当たり毎週、授業外の学習時間を4時間取らなければいけないということになります。これが1コマで、週当たり4時間ですから、10コマ取ればそれだけで40時間になってしまうわけです。

単位制度の基本的な考え方

□ 2単位の授業の場合の学習時間：

■ 学習時間の合計

90時間 (1単位=45h×2)

■ 授業外の学習時間=総時間数-授業時数

60時間 (=90-15×2)

■ 1週あたり授業外学習時間

4時間 (=60÷15)

このようにいろいろと大学設置基準で規定されていることには、背景がもちろんありまして、その一つが

1998年にその当時の大学審議会が出した答申です。その答申の中で、大学の教育の現状について、かなり厳しいトーンで指摘がなされたのです。簡単に言うと、大学の単位の与え方は非常に甘い。本来の規定の15回、15週をきちんと担保していない。それにもかかわらず単位は出している。こういう在り方はまずい、もう少しきちんと授業時間を確保すべきという指摘がなされ、学業成績の厳格化、成績評価の厳格化もうたわれました。

特に授業外の時間をきちんと取らせるようにということだったのですが、学生に自由に単位を取らせておくと、後で単位が取れなくなることを心配する余り、どうしても単位を早取りする傾向になってしまうなど、いろいろな心配があります。1週間に10コマ以上取っている学生もごく当たり前に見られるようになっていきます。そうなってくると理論上、当然授業外の学習時間が確保できないということになってくるので、それを担保するために各大学はいろいろな対応を取るようになりました。

その一つが単位の上限定で、キャップ制とも言います。つまり、学生が1セメスターで取れる単位数の上限を決めるということを行う大学が増えてきたわけです。一番新しい平成20年度の文部科学省調査のデータでは全体の68%、約7割の大学が上限設定をするという状況になっています。

2. 大学生の学習行動・教育観の現状

さて、次に大学生の学習行動あるいは教育観の現状を、各種の調査結果に基づいて見ていきたいと思えます。一つは、昨年度まで東大教育学研究科におられた金子元久先生が指導しておられた「全国大学生調査」の結果、それからベネッセの教育研究開発センターが2008年に行った「大学生の学習・生活に関する意識・実態調査」、これは同志社大学の山田先生が中心となって進めてこられた調査です。主にこの二つを使いながら、どういう状況になっているかを見ていきたいと思えます。

2-1. 主体的な学習行動は弱く、教員への依存度は高い

あらかじめ結論を言うと、学生の主体的な学習、特に授業外の学習が非常に弱いということが数値とともに出てきます。例えば、「授業の中でグループワークやディスカッションに積極的に参加しているか」という問いに対して「あてはまる」「ある程度あてはまる」と肯定的に答える割合は、40%強にとどまっています。それから、「先生に相談したり、勉強の仕方を相談して

いるか」という問いに対して肯定的に回答している割合は、何と26.9%という状況です。何か困ったら教員に相談するかというと、相談はしない。

ところが、教員への依存度は結構高いのです。例えば、「授業の意義や必要性について教えてもらいたいか」という問いに対しては、「教えてほしい」と答える学生が全体の61.5%、「自分で見たい」と回答する学生は、その裏返しで38%程度にとどまっています。それから、「授業で必要なことをすべて扱ってほしいか」という問いに対しては、「そう思う」「ややそう思う」という肯定的な答えの割合が74%で、反対の「授業はきっかけにしかすぎないあとは自分で学んでいきたい」という回答は35%程度にとどまっているという状況で、教員の教えとは関係なく自分でいろいろやっていくという行動が何となく弱いという結果が出てきます。

それから、ベネッセの統計で、授業の好みに関するデータがあります。「応用的・発展的な内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業」と、それとは反対に「応用・発展的内容が中心の授業」のどちらがよいかというと、よいのは前者、つまり応用的・発展的な内容は少なくともいいと考える学生が70%以上です。それから、「教員が知識・技術を教える講義形式の授業」と「学生が自分で調べて発表する演習形式の授業」とではどちらが多い方がいいかというと、こちら82%の学生が、とにかく教員が教えてくれる授業の方がよいという考え方をしています。全体に前向きではないことがよくわかると思えます。

2-2. 学習時間に見られる傾向

予習・復習をするということに関して言うと、必要な予習・復習をした上で授業に臨んでいると肯定的に答える学生は、全体の3割以下というデータも出てきます。これはもちろん専攻分野によって多少違いますが、平均すると今言ったような状況です。

授業・実験の課題、準備・復習のための時間を見ると、週0時間、ほとんどしていないという学生が結構いて、してもせいぜい週1～5時間程度と答える学生が多い。また、学期中における授業と無関係の学習時間の週当たりの時間数を見ても、非常に少ないことがデータから見て取れます。授業外の学習については、残念ながら多くの学生が消極的だということです。

さらに驚いたことに、この1カ月にどのぐらい本を読んだかという問いに対して、実に3割ぐらいの学生は1冊も読んでいないと答えていて、1冊と答えた学生と合わせると半数以上に達してしまうという状況です。

2-3. 授業への取り組み方

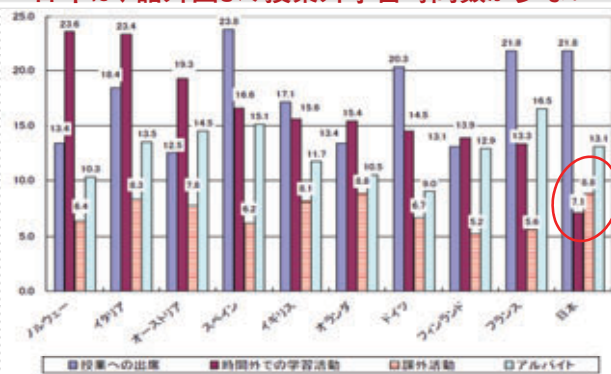
非常に情けない状況ではあるのですが、一方で、授業への取り組みは結構まじめなのです。例えば「授業に必要な教科書、資料、ノート等を毎回持参する」と90%以上が答えていますし、「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」と90%近くが答えています。「授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる」学生は70%ぐらいいるのです。これにも少し驚きます。授業にはなかなかまじめに取り組んでいることはわかるのですが、「授業でわからなかったことは先生に質問する」「授業の復習をする」「授業の予習をする」というところになると途端に少なくなるということで、この点でも先ほどのデータにみられるように、自発的な学習行動が弱い傾向を裏付ける結果になっています。

1年、2年、3年、4年と学年が進むにつれて予習・復習をする割合がどう変わっていくかという、予習・復習のいずれも1年生のころはそこそこやっていたものが、学年が上がるごとにどんどんその割合が下がっていきます。それでは学生たちは一体何に時間を割いているのでしょうか。具体的に見ていくと、予習・復習あるいは大学の授業以外の自主的な勉強を足してみても、テレビ・DVDの視聴の時間には足りません。圧倒的にテレビ・DVDを視聴している時間が多く、趣味の時間がさらに多い。そちらの方に時間を使っていて、授業外で自発的に勉強しようという姿勢ができていない状況だということがわかります。

授業外学習時間を世界の主要国と比較してみると、その差は歴然としています。中教審の2008年の答申の資料編に載せてあるデータで見ると、トップはノルウェー、2番目がイタリア、3番目がオーストリアです。世界の各国と比べて日本の学生の授業外学習時間が少ないことは一目瞭然です。

学期中の活動内容の国際比較(1週間)

日本は、諸外国より授業外学習時間数が少ない



【出典】中教審答申(2008)付属資料

2-4. 大学の自己評価と学生評価の格差

このように、非常に消極的というか、自分から働きかけて学習するという行動が弱いことがいろいろな数字から見て取れるわけですが、このような状況に対して大学側が何もしていないということではありません。先生方も日々学生に接していて危機感を持っておられて、さまざまな取り組みをされていると思うのですが、ちょっと残念だなと思うのは、学生がそういう大学側の働きかけについて必ずしも理解しているわけではないということです。

これがその実態を示す一つの資料なのですが、大学側が自分でやっているかどうかという大学の自己評価の割合と、学生側が自分がそういう指導を受けたかどうかという学生の評価との間には、意識の差が生じています。例えば、「学習目的がきちんと示されているかどうか」。大学側は約40%が示していると答えているのですが、学生側は必ずしもそのようには評価していません。それから「少人数の授業が多いか」。これも、どの大学も今は非常に予算的に苦しい中、頑張っていると思いますが、そのようなことはあまりやっていないと見る学生が多い。手を掛けてもなかなか学生は正当には評価してくれないという状況があるわけです。

3. 主体的な学習を促す試み

学生の学習意欲がなかなか高まってこないことの結果として、授業外の取り組みが非常に弱いという状況に関して、一体どのように取り組めばよいのかという話で、主に初年次教育と先輩学生が自分と同輩あるいは後輩の学生に対してサポートするピア・サポート、それから、これは手前みそになりますが名古屋大学で開発した学生向けの学習・生活ガイドを見ていきたいと思います。

3-1. 初年次教育

まず初年次教育ですが、これは簡単に言えば学士課程の4年間をのっぺりと過ごすのではなく、初年次、高校と大学との接続期である最初の年に重点的に学生に指導していくという考え方で、「高校(と他大学)からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と定義されています。

高校から大学に進学すると、かなり状況が変わります。そのことに戸惑わないように、大学に適応してその中でちゃんとついていけるように、そして自分で学習できるようにということをサポートしていく取り組

みとすることができます。

初年次教育は、大学生活への適応を促す、大学に必要な学習技術(読み、書き、批判的思考力、調査の方法、タイム・マネジメント)、あるいは自己分析やライフプラン・キャリアプランづくりという内容で行われます。

事実、初年次教育を行っている大学は結構あって、大阪市大の渡邊先生が行われた初年次学生への指導内容を問うたデータを見ると、スタディスキル・アカデミックスキルについてきちんとした指導をするというところが70%を超えています。つまり、大学できちんと学習をしていくために、ごく基本的なスキルは最初に教えようという姿勢が多く大学の見られるわけです。

その状況をまた別のデータで見てみようということで、授業への取り組み状況を学生に聞いています。「授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる」「授業でわからなかったことは、自分で調べる」「資格や免許の取得を目指して勉強する」等々の問いに「あてはまる」と答えた学生の割合は、先ほど申し上げた内容と少し違って、自分で調べるというのは結構上の方にありますが、予習・復習をしている学生はやはり少ない。しかし、1年生に限って言えば、全体よりは5ポイント以上、予習・復習に取り組んでいるという結果が出ています。初年次教育のそれなりの成果が、ここに出ていると思います。

しかし、弱い部分も多々あります。例えば「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」「実験や調査の機会を取り入れた授業」「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」を体験しているかどうかとなると、1年生も含めてかなり低い。つまり、体験的な学習あるいは実験、特に文系で言えば調査のような活動を取り入れた授業には、1年生では必ずしも十分に取組まれているわけではないということです。このような授業は、要は授業のその場で一発勝負というわけではなく、当然ながら授業外でいろいろ活動をして、それを授業でプレゼンするという形になります。従って、必然的に授業外の活動を促す形になるのですが、そのような点が1年生はまだまだ弱いという結果も出ています。

やはり大学の4年間できちんと学んでいく上では、このようなことを初年次にきちんとやっていくことが必要なのであって、まだまだそういう点では課題はあるということがわかると思います。

3-2. 授業時間外の学習を促すための条件

学生の主体的な学習行動を促していくためには、初年次のみならず4年間かけて、一方的な講義だけでなく双方向型の授業をきちんと行っていくことが大事で

す。その中にあっては、例えばディスカッションやディベートを採用したり、予習・復習を設定する、場合によっては文章力や表現力を鍛えることも必要になってきます。それでは授業時間外の学習を促すためには、一体どういう条件が必要なのでしょう？

まず一つは、授業外学習の内容についてシラバスできちんと具体的に指示することが求められます。全国の大学のシラバスを見ると、最近はこの点が意識されるようになってきていることがわかります。名古屋大学も含めて、授業の中で何をするかということはきちんと書いてあるのですが、その前後に何をするか、何をしておかないと、この授業での学習効果が上がらないという指示なり表現が明確でない場合があります。

2番目には、授業外学習を促すために、コースパケット(資料集)をそろえることも大事です。非常に厚い教科書を用意すれば済むことかもしれませんが、授業の中だけで話をするのではなく、予習・復習用の資料もセットにして学生に渡していくという方法も一つあるのではないかとことです。

この点は、アメリカやオーストラリアなどと比べると、日本の大学は弱いです。著作権の問題がなかなかクリアしづらいので作りにくいのですが、アメリカやオーストラリアの大学では、学期初めのころに大学の生協の本屋に行くと、それぞれの授業ごとにかなり分厚い資料集、テキスト類が販売されています。あのようなものがちゃんとあれば比較的スムーズに授業外の学習を指示できると思うのですが、日本はこういう点ではやはりなかなか難しいということがあります。

それから、そのようなものが用意できないまでも、少なくとも参考文献は提示していく。それぞれのテーマに応じて、こういうテーマであればこういう文献がある、それはきちんと読むようにという形で課題を出すということも当然必要だと思います。そして、小テストなどを行って学習内容の点検を行っていくことが一つの方法として考えられるかと思っています。

3-3. 名古屋大学の取り組み

3-3-1. 学生向け学習・生活ガイド

ほかにもいろいろなやり方はあろうかと思っています。どのような方法がいいのか、私ども名古屋大学の高等教育研究センターでもあれこれ考えてきました。その中でこれまでにいろいろなものを作ってきたのですが、その一つに学生向けの学習・生活ガイド『ティップス先生からの7つの提案』という冊子があります。

ただかたかた十数ページの小さな冊子なのですが、優れた授業を実践するために何が必要なのか、何をしなけ

ればいけないかを学生編、教員編、IT活用授業編、大学編、教務学生担当職員編に分けて簡潔に示したもので、名古屋大学の高等教育研究センターのウェブにもすべて載せてあります。グーグルで調べていただくとすぐに出てきますので、見ていただければ幸いです。例えば「教員編」を見ると、優れた授業を行っていく上では、「学生と接する機会を増やす」「学生間で協力して学習させる」「学生を主体的に学習させる」等々、7点の大きな行動目標が出ています。何だそんなことかとお感じになるかもしれませんが、アメリカの高等教育学会の有志がかなりインテンシブな調査研究をした結果を七つぐらいにまとめて成果発表し、合わせてその冊子も出しています。そのコンセプトをお借りして作った名古屋大学版なのです。

『ティップス先生からの7つの提案』

- 名古屋大学に埋もれていた優れた教育実践を教員・学生・大学の視点からまとめ、大学の中で広く共有させる冊子
- のべ37,000部以上の発行
- FDやガイダンスでの活用



7点それぞれについて、さらに各項目ごとに具体的に何をするのかをまた7つ考えてみました。例えば「学生と接する機会を増やす」ための具体的な行動として、「クラスの学生に会ったら声をかける」「学生にオフィスアワーを積極的に利用するようすすめる」という具合に、大項目七つにそれぞれに小項目が七つ、7×7で49のヒントを作ってみました。こんなものも少し参考にさせていただくと、何かのお役に立てるかと思います。

『ティップス先生からの7つの提案』 (教員編)の提案内容

1. 学生と接する機会を増やす
2. 学生間で協力して学習させる
3. 学生を主体的に学習させる
4. 学習の進み具合をふりかえらせる
5. 学習に要する時間を大切にする
6. 学生に高い期待を寄せる
7. 学生の多様性を尊重する

その中から代表的なものとして、「授業時間外の学習を促進するティップス（ヒント）」を引っ張ってみました。一つは、「学習を上手に促す課題を与えよう」ということで、やみくもに学習課題を与えればいいというのではなく、そのあたりを十分考えながら、いきなり重い課題を出すのではなく、まずは軽く、比較的スムーズに達成できるような課題から与えていきましようということから始めて、その他いろいろなことを書きました。

授業時間外の学習の促進

『成長するティップス先生』ティップス先生』から

□ 学習を上手に促す課題を与えよう

- コースを通じて適切な量の課題をまんべんなく与えること、初めは取り組みやすい課題を与える。
 - 重い課題では、意欲をそいだり、ドロップアウトさせる。
- 学生が能力と知識の程度を把握し、最初は簡単な課題を用意。学生がもつ知識で取り組めるもの。

□ 課題の形式、内容につき複数の選択肢を用意。

- 無難な課題と、挑発的でやりがいのある課題、個人で取り組める課題、グループで行う課題。

41

課題についても、無難なものから頑張ってみようというものを、それから中には意欲的な学生もいますので、そういう学生には発展的内容の文献や課題を用意する。授業内容の延長上にある最先端の研究を紹介するのもいいのではないかと紹介しています。

学生が個人で学習することにはどうしても限界がありますし、さぼりたくなることもあります。そのようなときには学生同士で共同してやろうではないかと呼びかけています。また、それを教員の働きかけで促していこうということも書いています。

「ティップス」というのは、もともとはヒントやノウハウというぐらいの意味合いなのですが、もちろんこれをすればすべて授業実績が改善されますということではないのです。これはあくまで一つのヒントで、個々の先生方が持っている自分なりの工夫を集めたものです。また、これはあくまで名古屋大学の学生用に作ったものですが、コンセプト自体はどの大学でもお使いいただけるのではないかと思います。七つの大項目が納得できるものであれば、自分の大学の教員あるいは学生の状況を踏まえながら、七つの大項目それぞれについて具体的に何ができるかを話し合われて、それを実践してみることが、かなり有効な方法としてあるのではないかと思います。

もう一つ、「大人数の授業で課題を効果的にフィード

バックするためのティップス」についてご紹介します。教員は非常に多忙です。その中で授業をしなければならない、教育改善にも努めなければいけないということで、当然、授業にすべての精力を注ぐことができません。そうであればやはり能率的に、効率的に授業を実践していきましょうという呼びかけでもあります。しなくてもいい苦労はなるべくしないようにという趣旨で考えています。

例えば、多人数の授業で課題を与えることは非常に大変なことなのですが、それが本当に学生に必要なだと考えるならば、やらざるを得ません。しかし、それはあまりに大変なのでやりたくない、自分にはできないと、つい思いがちです。そのようなときに、ちょっとした工夫をすれば案外楽にできますよというヒント、ノウハウを考えてみました。多人数の授業でも、ちょっとした工夫で課題を出すことはできます。ご参考いただければ大変光栄です。

授業時間外の学習の促進 『ティップス先生からの7つの提案』から

- 学生同士で協力して学ぶことの重要性を伝える
- 初回の授業では学生がお互いに知り合える活動を取り入れる
- 授業時間の内外において共同で行う課題を出す
- 授業の予習や試験勉強をクラスメイトと一緒にすることをすすめる
- グループで学習できる場所と利用方法を教える
- 学生が提出したレポートや答案の内容を受講生全体で共有する
- 学生間でそれぞれの課題を評価し合う活動を取り入れる



43

3-3-2. レポート書き方講座

名古屋大学高等教育研究センターで大学生の学習意識、学生たちが学習活動で困ったことを調べたところ、レポートの書き方や授業のノートの取り方などが挙がってきました。要は、授業だけでは勝負できない、授業だけでは学生に授業外の学習、自発的な学習を促すことが難しいため、いろいろなことをしていかざるを得ないということなのです。その対策の一つが「レポート書き方講座」です。

学生へのアンケートでも真っ先に出てくるのがレポートの書き方がわからないということです。私も昔からよく学生にレポートを書かせていました。ほとんど何のインストラクションもなしに、とにかくこの授業でこういうテーマについて書きなさい、分量はこうだという感じで、ほとんど言いつばなし、出しっぱなしです。授業の最後ということもあって何の指導もし

ないという困った教育指導を行って来ました。

果たせるかな、学生から提出されるレポートは、非常に問題が多いものになります。言わずと知れたコピーも横行してきます。しかし、それはある意味では仕方がない面もあります。それはどうしてかと言えば、教員がレポートとはそもそもどういうものなのか、どのように書くのかを教えないで、大学生になったのだから書けるだろうという前提で、ただこれについて書きなさいと指示しているだけだからです。

私も本当に未熟で、そのようなことばかりしていましたが、あるとき学生はわかっていないのだということに気が付きました。そして、これは授業外でレポートの書き方についての指導をするしかないのではないかと考えて、今、私どもセンターでは学生を対象にレポートの書き方の講座を開いています。初年次の少人数セミナーとセットにして、セミナーの中でさせる調査の延長線上で論文を書いてみようではないかということをやっています。また、それをちょっと発展させる形で、学生の論文コンテストも実施しています。

あと、これは私どもは不十分でほとんどやっていますが、アドバイザー制度・チューター制度も、学生の授業外の学習を促すためには必要になってくると考えています。

3-4. ピア・サポート

いま一つは、教員だけではどうしても限界がありますし、職員に協力を求めるにしてもやはり限界があります。とすれば、そこはやはり学生同士で頑張ってもらおうということで、ピア・サポートというものも一つの在り方かと考えています。

3-5. スタディティップス

そしてもう一つ、私ども名古屋大学では、「スタディティップス」といって、教員のためのティーチングティップスだけでなく、学生、特に新入生に向けて、一体大学では何が求められるのかということを知りやすく説明したティップス、学習活動の進め方のノウハウ集も作っています。

3-6. ラーニング・コモンズの構築

最後に名古屋大学の取り組みでもう一つご紹介したいのは、図書館の活動です。大学の中にはいろいろな方がいます。教員だけが頑張るのではなく、事務職員だけが頑張るのでもない、もちろん執行部だけが頑張るわけではなく、みんなで協力し合って学生の学びをサポートしていくことが必要なのだと思います。そのよ

うな中で一つ注目されるのが図書館です。

今は図書館の職員の人たちも結構忙しいと思うのですが、名古屋大学の図書館ではいろいろな講座を開設してくれています。アカデミック・プレゼンテーションの入門講座、あるいは学生や教職員が希望して具体的なテーマを示してくれば、こちらの方から出向いて講習をやりますというオーダーメイド講習会も開いてもらえます。図書館の施設・設備も大きく変えて、ラーニング・commonsと言っていますが、学習空間に変えていこうという発想です。

名古屋大学の図書館では、入り口を大胆に変えてスタバの喫茶店を入れたり、通常の閲覧室でなく学生が共同で学習し、議論できる空間も作っています。また、BSのニュースを語学の勉強用に視聴できるスペースも作っています。極めつけは院生をヘルプデスクに置き、レポートの書き方や学習相談に応じるという体制も整えています。つまり、いろいろな人たちがいろいろな形で学生の学習にかかわるような体制になっているわけです。

4. まとめ

それでは、まとめに移りたいと思います。学生の学習活動を支援するためということですが、今に始まったことではないと思うのですが、能力・知識の獲得は、授業時間だけで行うのはやはり難しく、授業と授業外学習との有機的な連携が不可欠です。

授業外学習の支援・促進

- 主体的な学習行動を習得させるために、教員の積極的な働きかけが必要。
- 授業外学習への取組を促すための工夫。
 - シラバスの工夫:事前学習の具体的指示
 - カリキュラムの構造、学生の生活実態への着目
 - 授業外での教職員による多様な働きかけ

授業と授業外学習との有機的な連携については幾つかの研究もありますが、それができれば知識・能力の習得だけでなく、大学教育そのものに対する満足度もやはり変わってくるといわれています。授業は熱心に出るけれども授業外の学習をしないという学生もいますが、そういう学生は授業にも出てこない、授業外学習もしない、一番学習活動の鈍い層と、能力の形成という点でも、大学教育への満足度という点でも変わら

ないという結果も出ています。授業外学習への学生の取り組みは、現状では極めて不十分です。

先ほども申しましたように、大学教育を改善するためには、教員だけでなく、大学組織、執行部、事務職員がそれぞれの役割・責任を果たすことが重要です。しかし、それだけでは思うようにはいきません。中心は学生ですから、何より学生自身にも教育改善・授業改善に取り組んでもらう、加わってもらうという視点もとても大事なのではないかと思います。その一つがピア・サポートです。実際に行っていく上ではまた留意点もあろうかと思えますけれども、このようなことに学生自身も巻き込んでいくことが重要なのではないかと考えます。

それを前提にした話ですが、主体的な学習行動を習得させるためには、教員の積極的な働きかけが必要です。ちょっと手を伸ばせば届く、自分でもできるなと思うような課題を与えるなど、ちょっとした工夫で学生に授業外学習を促すことは可能だと思います。そのような工夫をしてみる。個々の先生方はノウハウを蓄積しておられると思うのです。それをご自身だけで完結させるのではなく、ぜひお隣の先生方、あるいは学科の先生方、学部の先生方と共有して広げていけると、学生の学習の質向上に貢献していくことになるだろうと考えます。

学生の質をめぐる問題については端折りますが、いずれにしても学生の学びの質を高めて学生の授業外活動を促していく。そのことによって学生自身の成長を促進していくということが、今われわれに強く求められているといえるのではないかと考えます。

ご清聴いただき、どうもありがとうございました。

夏目 達也 (なつめ たつや) 氏 プロフィール
名古屋大学高等教育研究センター教授。
文部省大臣官房調査統計企画課専門職員、北海道教育大学助教授、東北大学アドミッションセンター教授を経て、2004年4月から現職。
専門領域は高等教育論・職業教育論。大学におけるファカルティ・ディベロップメントの組織化・高等教育におけるキャリア教育・大学院生に対する大学教員準備プログラムの開発等を現在の研究課題としている。
主な著書に『大学教員準備講座』(玉川大学出版部)、『ティップス先生からの7つの提案』(名古屋大学高等教育研究センター編) ほか多数。

特集3 学生の自発的学習を促す

—数学教員の視点から—

横田

佳之

首都大学東京
都市教養学部理工学系准教授

今回のFDセミナーでは、以下の3つについて、自分なりの考え方と工夫を紹介しました。

- (1) 余談・雑談について
- (2) 授業内容について
- (3) 演習について

以下、それぞれの内容を簡単に説明します。

(1) 最近では、海外出張時のホテル予約を、ホテル検索サイトでよく行います。検索結果から、よさそうなホテルを選び、その紹介文を眺めていると、

「map this hotel」

などのリンクをみかけます。直訳すれば、

「このホテルの位置を、地図上の点に対応させる」くらいの意味でしょうか。日本語で「地図」と訳される「map」は、そもそも

「地球上の各地点を、紙の上の点に対応させる」ことですが、これが転じて数学では、

「集合Aの要素を、集合Bの要素に対応させる」という意味に使われ、この「map」の訳として「写像」という専門用語が作られました。



大学の数学の授業では、難しい専門用語を身につけた抽象的な概念が次々と登場します。そんなとき、学生に消化不良をおこさせないために、

- ・専門用語は、とりあえず英語などに変換
- ・抽象的な概念は、まず例え話から入る

という方針のもと、上記のような余談に尾ヒレをつけて息抜きすることにしていきます。「写像」といわれても警戒心しか起きませんが、日常用語である「map」の語感を利用すればなんとかなります。慣れてしまえば、「写像」という訳語にも先人の苦勞が忍ばれましょう。

(2) 教育実習生の研究授業などで感じるのは、まず

・高等学校での授業1回分の内容が薄すぎる事です。これでは、大学の授業のペースに追いつかず、ノートもとれない学生が多いのも仕方ありません。また、

・読解力が必要な「応用問題」の待遇が悪いことも気になります。これでは日本語能力が育たず、公式に数値を代入することしか興味がない学生が多いのも無理ありません。適切な「応用問題」を紹介することによって、公式は漫画に登場するアイテムではなく、現実社会の道具であることを、その都度認識させることが必要だと思います。そのため、

- ・まず「動機」をきちんと意識する
- ・必要な「概念」を整理し、「目標」を設定する
- ・最後に「目標」を達成するための「技術」を磨く

という流れにそって教科書の内容をシャッフルし、切るところはバッサリ切って、内容を最小限に絞り込むことを心がけています。高等学校の教科書でいえば、「定義」の前に「応用問題」から入るやり方、といえるでしょう。「動機」から出発する「ストーリー性」を意識する習慣さえ身につけば、数学がもっている本来の力が、学生の自発性を引き出してくれるものと信じています。(3) 数学を理解するためには、実際に「手」を動かして計算する「演習」が必要不可欠です。20年「演習」をやってきて、いちばん効果的だと思うのは、毎回「小テスト」を行って採点するシステムです。具体的には、

- ・前半は「小テスト」、後半はその解答
- ・個別に返却し、注意すべき点をコメントする
- ・最後の20分は、落第組を残して「補習」という具合です。学生のアンケート結果をみると、

・授業の復習をする「くせ」がついた

・直後に解答が聞けるので、身につきやすい

・学習面でも精神面でも、「補習」がありがたいといった意見が多く、それなりの成果を上げているように思います。また「小テスト」対策がきっかけで、学生が集まって勉強する習慣ができたりするようです。



【著者プロフィール】

横田 佳之 (よこた よしゆき)
都市教養学部理工学系数理学
コース准教授
専門：位相幾何学

特集4 ブレンディッドラーニングの取り組み

—自発的・主体的学びを支援するeラーニングの利用法—

北澤

武

首都大学東京
大学教育センター准教授

1. はじめに

近年、国内外の高等教育機関において、対面授業とeラーニングシステムを融合させた「ブレンディッドラーニング(Blended learning)」が実践されている(安達 2007)。我が国の高等教育におけるブレンディッドラーニングの実践に着目すると、年々その数が増加している。この背景として、2005年1月に中央教育審議会から出された「我が国の高等教育の将来像」に関する答申の影響が指摘される(宮地 2009)。この答申の中では、eラーニングの普及等の中で各高等教育機関は個性・特色の明確化を一層進める必要があることが謳われている。一方で、2008年度に改正された大学設置基準により、FD (Faculty Development) の義務化が行われたことから、各大学では授業改善が求められ、学習者の動機づけや学習方略を向上させる効果があるブレンドラーニングの実施に拍車がかかったものと思われる。

本学において、平成18年度に情報基礎科目(情報リテラシー実践)などにおいて、eラーニングシステム(Blackboard Academic Suite™)を試験的に導入した。平成19年度から、これを用いた教材配信やレディネス調査、授業評価アンケートを行うなど、本格的に運用してきた。筆者は平成19年度から情報基礎科目を担当しているが、以下に述べる自己調整学習と動機づけの理論的背景から、eラーニングシステムのフィードバック機能に着目し、ブレンディッドラーニングの取り組みを行ってきた。以下、詳細を報告する。

2. 自己調整学習と動機づけ

自己調整学習とは、「学習者自身が動機づけや学習スキルを高めることによって、自らの学習を積極的かつ前向きにコントロールしていく学習活動」と定義されており(Zimmerman 1998)、近年、自発的・主体的学びを支援する学習方略の一つとして注目されている。学習者に自己調整学習を促すためには、目標設定や累積的な達成感を与えるなど、まずは動機づけ過程に焦点を当てることが重要とされている。これにより自己調整学習が向上し、自発的・主体的学びが促され、認知面・感情面・動機づけ面での結果に影響を与えると指摘されている(図1)。

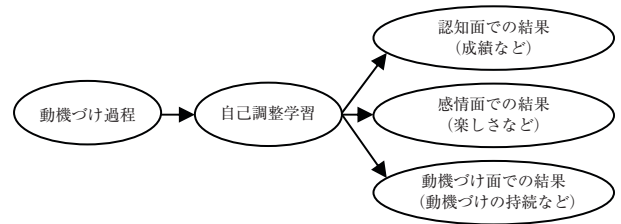


図1 総合的なモデル

動機づけ過程が自己調整学習を促し、学習に関する肯定的な結果に影響する(Schunk and Zimmerman (2008) 塚野編訳(2009), p.120より引用)。

3. eラーニングシステムの利用法

eラーニングシステムには、学生が課題を提出し、教員にコメントを記述する機能と、教員が課題を採点し、学生にコメントを記述する機能がある。教員が学生一人ひとりに採点した課題の成績(点数)とコメントは、フィードバック機能を用いて個々に確認することができる(図2、3)。毎回、課題の成績や教員からのコメントを確認できるフィードバック機能を利用することは、学生に目標設定や累積的な達成感を与える「動機づけ過程」の役割として有効であると考えられる。

上記のフィードバック機能に加えて、各回の教材と採点基準を明確にした課題をeラーニングシステムに配置することで、学生に「毎回、課題で高得点を取得したい」という動機づけを促すことが可能になる。この結果、高得点の取得を意識した自己調整学習と、フィードバック機能で成績を確認した後に復習を行うなどの自己調整学習が期待できる。

4. 授業評価アンケート(学生)の結果

紙面の関係上、筆者が担当する情報基礎科目(2009年度後期情報リテラシー実践IIB)で実施された授業評価アンケート(学生)の結果についてのみ報告する。

授業時間外学習の項目について、平均値は2.48であり、当該授業の全コマの平均値(1.71)よりも高い値であった(選択肢は、1. ほぼ0時間、2. 30分程度、3. 1時間程度、4. 90分程度、5. 2時間以上)。

次に、自由記述(「この授業で良かった点、他の授業でも取り入れてほしい点などを記述して下さい。」)の結果に着目すると、「講義内容をあらかじめ閲覧できるようにしてあったこと(良かった)」などの回答が

項目名	Details	期日	最終成績比率 比率項目	成績	コメント
第1回授業		2009/10/04		10	
第2回授業		2009/10/05	2011/01/06 11.82	5	これから頑張ってください。
第3回授業		2009/10/12		1	
第4回授業		2009/10/12	2011/01/06 11.82	5	学習が重要だと思います。
第5回授業		2009/10/19		1	
第6回授業		2009/10/19	2011/01/06 11.82	2	今回の内容はよかったです。
第7回授業		2009/10/26		1	
第8回授業		2009/10/23	2011/01/06 11.82	0	
第9回授業		2009/11/06		1	
第10回授業		2009/11/09	2011/01/06 11.82	2	前回授業についていけなかったので頑張って勉強します！
第11回授業		2009/11/16		1	
第12回授業		2009/11/16	2011/01/06 11.82	5	もう少しがんばって頑張りたいと思います。
第13回授業		2009/11/23		1	

図2 フィードバック機能の例

コメント欄は学生が記述したコメントを意味する。教員のコメントは成績（点数）をクリックすることで閲覧可能。

得られた。また、フィードバック機能については、「成績が、目に見える方式で見えるのはとてもよかったです。」などの回答が認められた。

以上の結果から、課題の成績が随時確認できるフィードバック機能、および、各回の教材と採点基準を明確にした課題を事前に閲覧可能にすることが、授業時間外学習の増加に影響を与えた可能性が示唆された。更に、このようなeラーニングシステムの利用法が、この授業で良かった点や他の授業でも取り入れてほしい点として一部の学生から支持されることが分かった。

5. まとめと今後の課題

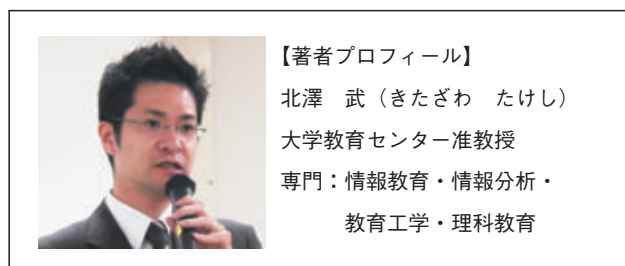
筆者はブレンドラーニングについて、自己調整学習と動機づけの理論的背景から、eラーニングシステムにフィードバック機能を利用し、かつ、各回の教材と採点基準を明確にした課題を事前に閲覧可能とすることで、学生の自発的・主体的学びを支援する効果が期待できると考えた。そして、上述のeラーニングシステムの利用法で授業を実践し、本学の授業評価アンケート（学生）の授業時間外学習と自由記述の項目に着目した。結果、この利用法は授業時間外学習の増加に影響を与える可能性が示唆され、一部の学生から支持されていることが分かった。今後の課題として、この利用法の効果を更に検証するため、継続な実践と認知面・感情面・動機づけ面の効果を追究することが求められる。



図3 課題の採点基準と教員からのコメント例

参考文献

- 安達一寿 (2007) ブレンドラーニングでの学習活動の類型化に関する分析, 日本教育工学会論文誌, 31(1), pp. 29-40.
- 宮地功 編著 (2009) eラーニングからブレンドラーニングへ, 共立出版, 東京.
- Schunk, D. H. and Zimmerman, B. J. (Eds.) (2008) Motivation and Self-Regulated Learning: Theory, Research, and Applications. Lawrence Erlbaum Associates Publishers. (塚野州一 編訳 (2009) 自己調整学習と動機づけ, 北大路書房, 京都)
- Zimmerman, B. J. (1998) Developing self-fulfilling cycles of academic regulation: an analysis of exemplary instructional models. in Shunk, D.H. and Zimmerman, B.J. (Eds.), Self-regulated learning, .New York: The Guilford press.



特集5 学生であることと学ぶこと

—学生の声①—

伊永

章史

首都大学東京
都市環境学部材料化学コース4年

大学入学時に、「君たちはもう生徒ではない、学生なんだ」という言葉をよく耳にします。私もこの言葉を聞きましたが、生徒と学生の違いは何なのかを考えもせず、ただ呼び方が変わるんだなという程度に受け取っていました。しかし今は、生徒が学生に変わり、学習が学修に変わることの意味こそが、学生の自発的な授業時間外学習の根幹にあると考えています。

一般に、中学や高校に通う学習者のことを「生徒」と言います。ここでは資格を持った教員によって教えることが基本であり、生徒は「学習」しています。一方、大学全入時代とは言われますが、あくまで**大学は学びたい人間が集う場所**であり、その大学に通う学習者は「学生」と言います。そしてその学生が行う学びを「学修」と呼んでいます。つまり「学修」には、**能動的な意味合いが自動的に含まれている**ということになります。

このことは**学生が学びたい人間であることを自覚すれば自然と自発的に学ぶようになる**、というある種の理想論につながります。

しかし、若者が社会へのステップとして大学に進むようになり、私は大学が学びたい人間のみが集う場所ではなくなってきている、言い換えれば大学には「学修」しない学生も存在しているように感じています。

単位時間に組み込まれているとはいえ、授業時間外学習はあくまで学生個々人の自発的な活動です。この**自発的な活動は、主に興味や使命感によって引き起こされます**。そして、大学としてアプローチできるの

は興味に対してであり、本学で最もこのアプローチをするべき個所は、**各専門分野の基礎学問**であると考えます。この過程ではある程度の知識の詰め込みが要求され、故に授業時間外での学習が不可欠です。しかしながら、ここで自発的学習に取り掛かる興味を引き出すことは非常に難しいと感じます。私は、**基礎学問がどう現実社会につながっているかを学生にイメージさせることで、学修意欲を刺激するのではないかと**考えています。例えば、三角関数を学ぶ際に、直角三角形の一辺の長さや直角でない一つの角度がわかれば他の辺の長さがわかるという法則は、道路の測量などに使われる、など現実社会での事例を小出しにしながら教えることで、今自分が何を学んでいるかをイメージしやすくなり興味を引き出せるのではないのでしょうか。これは一例ですが、各教員の方々が学生に与える影響は非常に大きいため、授業や参考書選定に対してさらなる取り組みが望まれます。もちろん学生個々人も、社会進出に向けたキャリアアップなどにばかり目を向けるのではなく、学生であることを意識し、本業の学問にもしっかりとした姿勢で臨むことが必要でしょう。と、私自身にも言い聞かせます。



特集5 学べる場所を

—学生の声②—

田邊

広之

首都大学東京
システムデザイン学部ヒューマンメカトロニクスコース3年

「日本の学力が低下している。」そういった報道やニュースをよく目にする事がある。そして、実数値からみて、日本の学生の学力は、アジア圏で中国や韓国に後れを取った。この学力の低下をある学者さんは、「学力低下はしつけ力低下の結果だ。子どもを誘惑する“遊び”が多すぎることも学力低下の原因。学力低下は日本が豊かになった結果生じた。学力低下は若者の価

値観の変化。少子化が学力低下を招いた。」と論じている。

今回のFDセミナーで先生方の講演を拝聴し、感じたことはこれと同じである。つまり、「**学力を向上させる方法**」ではなく、「**低下させない方法**」を探られていると感じた。私は、都立産業技術高等専門学校からの編入生であるが、高専時代では考えられない先生方の

考えであると感じた。高専では、先生方は勉強を推薦することはしても、勉強を強制させることは全くしなかった。ただ先生方は、「勉強はしといた方がよいよ。」それだけ言い、勉強する環境を整えるだけ。頼めば無償で「化学セミナー」や「TOEIC英語」の講義（高校規模であったから可能であったとは思うが・・・）を開いて下さった。

今回議論に上がった「授業時間外学習時間の増加」は、根本的に何か本質が違おうと思えた。

勉強をしに大学に来ているのに「授業外で勉強しろ」と言うのは何か間違っていないだろうか？大学や授業で理解出来ればその方が良いのでは？大学で教えてくれないなら大学とは何か？

確かに、「継続は力なり」という諺があるとおり、TOEICや受験勉強などは勉強を行った時間に比例しスコアが伸びると思う。しかし、「時は金なり」という諺もある。つまり、如何に効率良く勉強するかも学習にとっては重要といえる。その時、個人で学習を行うのは果たして効率的なのか？

テキストを見つけ課題を探し、回答を導き、答え合せをし、採点をするという動作は果たしてすべて必要なのだろうか？導きを勉強するだけでも十分学習の効果はあるのではないかと私は思う。

つまり、大学で授業外の勉強をサポートすることが「学力向上」に繋がるのではないかと考える。

大学の持つ資格・進学
の膨大なデータを生かし、放課後に「学習塾」のような半講義を行うのはどうだろうか、つまりTOEICならば、1週間に1日でも、学内で模擬受験が出来れば、TOEICを勉強する学生は集まるだろう。マークシートを配り放送を流して、データを読み込んで解答をHPに掲示するだけなら予算も少なくてもよい。毎週行えば参加者は確実に力がつくと思う。



各専門分野であれば、各学科の院生や博士課程の先輩等がTAとして講義形式で放課後授業を行ったりすれば、実際にその内容を先に通った人の生きた勉強を学べるのではないかと思う。

「継続は力なり」「時は金なり」、つまり「力は金なり」だと感じる、「力（学力）は財産（結果）」となるし「学力を得るには資金が必要だ」だとも感じる。学校はその金という部分を学生に平等に振り分け「**学べる場所**」を用意する事が非常に重要だと思う。学生会館を24時間OPENにして毎日のように飲み騒いでいられる場所を提供するよりは、授業外でも勉強させてくれる場所を提供して頂きたい。



学生目線のシラバス ～自発的・主体的な学びのために～

学生は“シラバス”に対して、どのようなイメージを持っているのでしょうか？

「授業内容が書かれた、なんだか分厚い冊子？」「学期の初めにちょっとだけ見る、授業のカatalogのようなもの？」などなど、シラバス本来の役割をきちんと理解し、有効に活用している学生はあまり多くないのが実情ではないでしょうか。

大学における教育の質の向上が叫ばれる中、シラバスは

- ①各科目の到達目標や学生の学修内容を明確に記述する
- ②準備学習の内容を具体的に指示する
- ③成績評価の方法・基準を明示する

ことにより、学生の“自発的・主体的な学び”を後押しする有効な手段として重要視されてきています。

本学FD委員会においても、昨年度「シラバス作成のための参考資料」を全学に発信し、より学生の立場に立ったシラバスの作成を呼びかけてきました。その結果、平成22年度と平成21年度の都市教養プログラムの各科目のシラバスを比較したところ、明らかな改善が見られました。

「習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標」の項目については、この授業を受けたことにより学生が「何ができるようになるのか」という視点での記述の割合はまだ高くないのが現状ですが、今後も引き続き、“学生目線のシラバス”に向けた全学的な取り組みを推進していきます。

項目	年度	平成22年度 【科目数 182】	平成21年度 【科目数 181】
15回分の授業計画・内容が明記されている		96.1%	15.5%
成績評価方法とその割合が明記されている		57.1%	40.9%
習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標が具体的に記述されている		79.1%	67.4%

特集 6 FDセミナー報告

尾崎

悠一

首都大学東京
都市教養学部法学系准教授

平成22年10月7日13時から、南大沢キャンパス6号館101教室において、「単位制度の実質化シリーズ No.2 学生の自発的学習を促す」をテーマとする平成22年度FDセミナーが開催された。参加者は91名（教員48名〔うち日野会場6名、荒川会場6名〕、職員32名〔うち日野会場3名、荒川会場3名〕、学生2名、その他9名）であった。

冒頭で、原島文雄学長による開会の挨拶と、司会の梶井克純教授（本学FD委員会研修部長）によるセミナーテーマの趣旨説明がなされた後、前半の部として、名古屋大学高等教育研究センターの夏目達也教授の講演が行われた。休憩を挟んだ後半の部では、本学の教員より「自発的学習を促すための取り組み例」が紹介され、その後、ディスカッションが行われた。なお、このセミナーは日野キャンパス・荒川キャンパスにも中継され、質疑応答やディスカッションパートでは、両キャンパスの出席者からも質問・意見が出された。

(1) 講演「学生の学習活動の現状とその支援」

講演では、まず最初に、高校教育の現状（高校生の学力・学習状況が多様化していることや高校教育が多様化していること）、学生（大学生）の学習行動・教育観の現状（自発的・主体的学習が少ないこと）について豊富なデータを交えて解説された。

そして、学生の自発的・主体的学習を促す上での初年次教育（講演では、「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習及び自発的な成長に向けて大学での学問的・社会的な経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と

紹介されていた）の重要性を強調した上で、名古屋大学での取り組み、取り組みから得られた成果について紹介されるとともに学生の学習サポートについての提案があった。すなわち、夏目教授が所属されている名古屋大学高等教育研究センターが作成する『名古屋大学新生のためのスタディティップス』や『ティップス先生からの7つの提案』の内容、名古屋大学高等教育研究センターによる「レポート書き方講座」や「学生論文コンテスト」、アドバイザー制度、チューター制度、名古屋大学の図書館の活動（アカデミック・プレゼンテーション入門、TAのためのライティング支援セミナー、資料検索や電子ジャーナル等についての講習会）について紹介され、また、授業外学習の支援・促進のための提案としてシラバスの工夫や教職員による学生への積極的な働きかけ等が挙げられた。講演後には質疑応答の時間が設けられ、セミナー参加教員から自らの教育体験に基づく質問・意見交換がなされた。

(2) 「自発的学習を促すための取り組み例①」

「自発的学習を促すための取り組み例①」として、都市教養学部人文・社会系の松阪陽一准教授より「論理学教育でのソフトウェアの使用例」についての報告がなされた。

松阪准教授は、米国のUCLA等で使用されているLogic 2000: Workbookというソフトウェア（非売品）を論理学の授業に用いている（同ソフトウェアを用いているのは国内では本学のみであるとのことである）。米国ではこのようなソフトの利用が活発であり、かつ、大学のサポートもなされているということである。同准教授が論理学教育の三本柱として挙げる①形式言語の構文論、②日本語から形式言語への記号化、③形式言語での形式的な証明の仕方、の各段階でソフトの用意する問題に解答することによって学生が学習を進めることができるということである（ただし、英語ソフトであることから、②は行えない）。論理学の概念をマスターするためにはかなりの数の練習問題を解く必要があり、練習問題をソフトで自動的に行うことには教育的な意義が大きく、（英語版であることに伴う問題点があるものの〔日本語化はコスト面から困難とされる〕）本ソフトウェアの利用により教育成果が挙げられていると報告された。論理学を好きになる学生は



熱心に取り組んでいるようである一方、学生全体のデータを見ると、他の教科との比較で劇的に授業外学習の時間が増加したとは必ずしもいえないとの指摘もなされていた。

なお、セミナーの席上で、実際にLogic2010 (Logic2000の後継版) のベータ版のデモンストレーションがなされ、参加者は松阪准教授の取り組みを具体的な形で理解することができた。

(3) 「自発的学習を促すための取り組み例②」

「自発的学習を促すための取り組み例②」として、都市教養学部理工学系の横田佳之准教授より「数学教育における自発的学習を促すための取り組み」が紹介された。同准教授の授業について、①雑談パート（つなぎ・つかみ）、②数学の本体のパート、③演習パートの3つに分けて、授業実施上の工夫について報告された。

それぞれのパートについて、①雑談パートは、専門用語や記号等の難解なものをイーズする試みであり、質問の仕方へのサジェスションにもなる、②数学的内容のパートでは、おもしろそうな具体例を含む問題から入ることによって、多少省略してもまとまった分量を教えるよう工夫がなされている、③演習パートでは毎回小テストを行い、小テストの結果と成績評価を対応させている（演習パートでほとんどできていない学生については、演習の残り時間と昼休みの時間を用いて居残り特訓を実施し、フォローをしている）と説明された。これらは、実際に授業で使用されている教科書や報告者の直近の授業の風景と合わせて説明されたため、参加者は具体的なイメージを抱くことができた。小テストの結果と成績評価を対応させることにより講義から演習の間に勉強する習慣づけがなされ、学生自身も「演習によって勉強の習慣づけがなされた」と自己評価しているとのことである。また、演習に向けての勉強においては、各学生が家で勉強するほか、コモンスペースで学生が集まって一緒に勉強する習慣ができるようになったと報告された。

(4) ディスカッション

上野淳大学教育センター長（FD委員会委員長）による司会進行のもと、夏目教授・松阪准教授・横田准教授を壇上のパネリストに、ディスカッションが行われた。松阪准教授・横田准教授の報告に対しては質疑の時間がなかったため、冒頭で授業での取り組み例に対して質疑応答がなされた。

司会の上野センター長がフロアの数名の教員を指名してそれぞれの授業での取り組み・工夫について報告

を求めたこともあり、教員の個性およびその授業が対象とする学問分野やカリキュラム全体における位置づけを反映した多様な工夫例がセミナー参加者間で共有された。また、本学の学生の学習の状況について情報提供・意見交換も行われた。

科目や教員の個性を超えた一般論として、受講者数が比較的大きい理数系基礎科目等を中心に、教育の質の改善のためにクラスサイズの適正化とTA等による授業支援が不可欠であり、授業時間内における学生のケアを行うTAの増員やそのトレーニングのために予算措置も含めた支援が必要であるという点で、パネリストおよびフロアからの発言者の共通認識が形成された。この共通認識は、授業外学習の適正化のためには授業の充実が必要不可欠であるという前提に基づくものであった。

また、大学教育センターの北澤武准教授より本学におけるe-learningの取り組み状況が紹介された。さらに、セミナーには学生も出席しており、学生の側から自らの経験に基づいて意見が出された。

学生の自発的学習を促すための議論として、理念的な側面（学生の学問関心・好奇心を刺激するような授業の提供）、テクニカルな側面（小テストの実施やその採点期間の短縮等）、制度的な側面（学生の学習を評価するような制度〔大学内のみならず社会的制度〕）など多岐にわたる論点が提起されたディスカッションパートおよびセミナーは、大森不二雄教授（大学教育センター）、夏目教授によるまとめの発言によって締めくくられた。



ディスカッションの様子(左から横田・松阪・夏目・上野)

特集7 本学学生の「授業時間外学習」の現状

舛本

直文

首都大学東京
大学教育センター教授

1. はじめに

日本の大学生は日頃勉強しないと言われてきて久しい。このような「日本で常識」とされる大学の学習風土（文化）はさまざまな調査結果によって裏付けられている。例えば、ベネッセの調査でも「大学以外での1週間の過ごし方をみると、『授業の予復習や課題をやる時間』は『0時間』が20.2%、『1時間未満』が28.5%であり、ほぼ半数が週に1時間未満であった。同様に『大学の授業以外の自主的な勉強』でみると約6割が1時間未満であり、総じて大学以外での学習時間が確保されていないことが確認できる」とされている（ベネッセ（2008）「大学生の学習・生活実態調査」）。同様の調査は多くの大学でも行われているが、ほぼ同様の結果を示している（東京大学（2007）全国大学生調査、広島大学（2005）大学生の教育・学習経験に関する調査）。ここには日本の大学の単位制度がはらむ構造的な問題と教員－学生間に持たれている大学の学びに対する意識に関する問題があるように思われる。

以下、本学の学生の「授業時間外学習」（授業のため

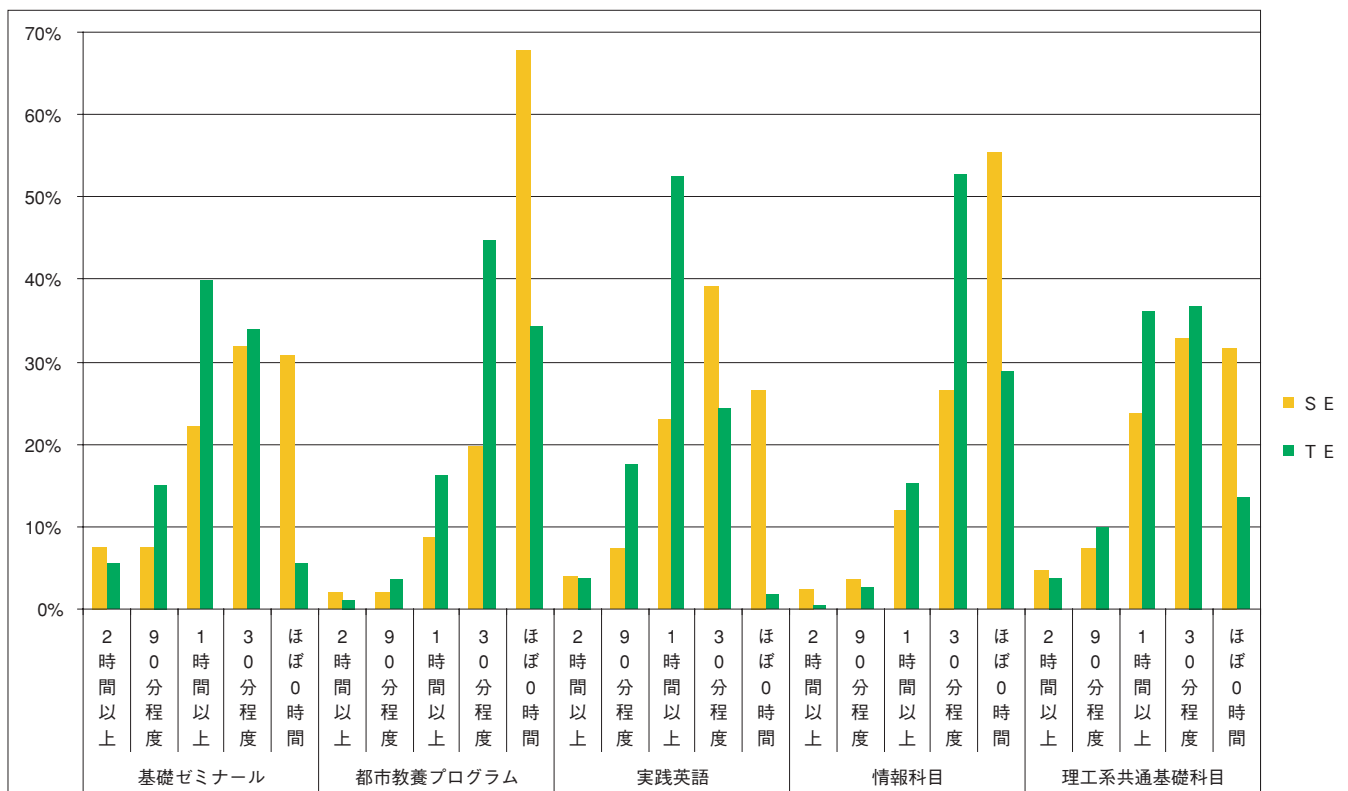
の予習や復習、課題などへの自主学習）の現状を概観し、FDセミナーのディスカッションの様子もふまえ、本学の教授－学習状況の改善に向けた情報提供とした。

2. 本学の学生の「授業時間外学習」の現状

表1は2010年度前期の教育プログラム毎の「授業時間外学習」の現状を5段階で示し、かつ学生の授業評価（SE）と教員による授業評価（TE）を比較したものである。このデータの質問はそれぞれ「授業時間以外で1週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか」（SE）と「授業時間以外で1週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習を課しましたか」（TE）という裏返しの質問であり、回答の選択肢は1. ほぼ0時間、2. 30分程度、3. 1時間程度、4. 90分程度、5. 2時間以上の5択であった。

本来は1週間に4時間の授業時間外学習を課すことが単位制度の実質化がめざすところであるが、学生の学習時間が0時間という回答が大きく目立っている。

表1. 2010年度前期「授業時間外学習」（SE・TE比較）



「基礎ゼミナール」30.8%、「都市教養プログラム（以下「都市プロ」と略す。）」67.7%、「実践英語」26.6%、「情報科目」55.3%、「理工系共通基礎科目」31.7%という結果が示され、30分程度の学習時間のデータを加えらるとほぼ6割近くの学生がほとんど授業外で学習していないことが分かる。特に「都市プロ」と「情報科目」の不勉強の割合が突出している。「情報科目」では授業時間内に課題を解決する授業展開が取られている可能性が高いと推察されるため、この結果はほぼ首肯できる。しかし、「都市プロ」に関しては、学生たちがほとんど授業外に学習していないことが明白である。さらに、「都市プロ」に対する教員の授業評価によれば、時間外学習を課したのがほぼ0時間34.3%、30分程度44.8%と約80%の教員がほとんど授業時間外学習を課していないことがわかる。このことが学生たちの不勉強の大きな要因となっていると推察される。「情報科目」でも80%強の教員があまり授業時間外学習を課していないことも明白である。「基礎ゼミ」「実践英語」「理工系共通基礎科目」では1時間から30分程度の授業時間外学習を課したという回答が多くみられるのと対照的である。ここには「勉強しない学生・勉強させない教員」という日本の大学教育風土の持つ昔からの構図が浮かび上がってくる。この構図に伏在する要因については後述したい。

3. 学生の授業評価（SE）の経年変化

表2は現在の授業評価の設問に変更された2007年前期から2010年前期までの「授業時間外学習」に関するSEのデータの経年変化をみたものである。「基礎ゼミ」は前期開講科目であり4回のデータしかないが他は7回のSEデータ結果の経年変化を示している。

この表からは「都市プロ」の0時間学習の割合が少しずつ減少している傾向が窺えるが、1時間以上学習したという割合はあまり増えてはいない。「基礎ゼミ」と「理工系共通基礎科目」では1時間以上の学習時間が増加している傾向が窺え、改善傾向がみられる。しかしながら、これとても4時間の授業時間外学習を要す単位制度の実質化にはほど遠い結果を示している。また、「実践英語」でも0時間、30分程度の割合が減少し1時間以上の学習時間が増加傾向にあることが窺える。

4. 現状分析と対応の可能性

このようにわずかではあるがSEデータの経年変化で改善傾向を示している理由として、基礎教育部会と連動した各プログラム検討部会など全学組織の自助努

力による授業改善の成果がここに反映されたと考えられる。その一方、「都市プロ」に関しては授業内容や教育方法などに関して授業担当者が情報を共有したり、改善に向けて話し合ったりする場が設けられておらず、本プログラムの狙いや学習成果に関するコンセンサスも得られていないという現状が、このような授業時間外学習に関するSEデータの結果にも反映されていると予想される。

さらに、先に「勉強しない学生・勉強させない教員」と述べたが、教員にとっては自己の専門分野の研究とそれに基づいた専門教育を主たる業務と考えている傾向も強く、基礎・教養教育に対する熱意がそがれている可能性も窺える。特に、授業時間外の課題等を課した場合には、その課題に対する評価やコメントを付す必要があり、その手間には膨大な時間を割く必要がある。学生たちも成績評価に反映されなければ課題に取り組むインセンティブも失ってしまいかねない。しかし、FDセミナーのディスカッションでも指摘されたように「都市プロ」は受講人数制限のない自由選択を基本としており、授業によっては大規模クラスとなっている。それは教授－学習プロセスに悪循環を招き、「大人数のクラスには授業時間外学習を課することができず、さらに楽勝科目となってしまう」という事態を生じさせている可能性が大である。少人数のTAの配置ではどうてい対応することができない200～300人以上のクラスが多いのが「都市プロ」の現状であるからである。大規模クラスへの何らかの制限を設けること、「都市プロ」担当教員間で科目の狙いや学習成果を確認し、授業時間外学習課題をシラバスで明示し、成績評価項目や方法、基準などを共有するという組織的な取り組みが必要であろう。

また、4年間で124単位を取得する単位制度では4年次の就職活動や卒業研究・論文をこなすためには、3年間で120単位程度（教職や学芸員の資格取得希望者はさらに多くの単位数）を修得するために、年間50単位もの履修をせざるを得ない構造的な問題が授業時間外学習を阻害していることも重要である。履修単位のCAP制も合わせて論議しなくてはならない問題なのである。

さらに言えば、高校から大学に入学していきなり自主自立した主体的な学習を強要される学生たちもたまったものではないのかも知れない。そのような学習習慣を身につけてきていないからである。その意味ではディスカッションでも指摘されたように、専門学部生や大学院生には自ら学ぶ自主的な学習態度がみられるようになるのに対して、入学したての学生たちには

初年次教育として何らかの手だてが必要なのかも知れない。本学では「基礎ゼミ」がその役割を担うのかも知れないがそのコンセンサスが得られているとは言い難い。シラバスにもそのような自学自習の学習態度を学習成果として評価するような記載もあまりみられない。

このことは全国的に見てもまだ未着手の領域とも言える。文部科学省の大学教育の改善状況調査（平成20年5月1日現在）によれば、初年次教育の具体的内容として「学生生活における時間管理や学習習慣を身につけるためのプログラム」を取り入れている大学は747校中232校にすぎない。シラバスの記載内容に関しても「準備学習等についての具体的な指示」247校、「準備学習に必要な学習時間」の記載は50校にすぎないのである。

ディスカッションでも指摘されたように授業時間外

学習も成績評価で縛るのではなく、授業に関心を持たせ、自主的に学ぶおもしろさを感じさせるような「大学における学びと内容」に配慮した授業時間外学習のあり方が問われているのである。

しかしながら一方では、社会が要請する学習成果や就職活動に利するような功利的な考えもはびこりがちである。確かに「大学の勉学だけではリアリティをもてない、教養教育が何のためのものか分からない、手応えがない」という夏目先生のご指摘ももっともである。この意味で基礎的な学習成果を応用・発展させることができる力を本学が掲げている「自ら学び、考え、行動する力」として育てることが求められているのである。しかし、各教員の個人的でバラバラな対応では教育改善成果はあまり上がらない。現在進行中の教育検討PTの検討の成果とともに全学として組織上の改善と対応も必要となろう。

表2. 学生の「授業時間外学習」の経年変化（授業評価アンケートより）

